授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2387 号

Validity of using immunohistochemistry to predict treatment outcome in patients with non-small cell lung cancer not otherwise specified

組織亜型不明の非小細胞肺癌患者の予後予測に対する免疫染色の有用性

太田 登博（おおた　たかひろ）

博士（医学）

| 論文審査結果の要旨 |
| --- |
| 本論文は、組織亜型不明の非小細胞肺癌患者の予後予測に対する免疫染色の有用性について初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。2015 年に WHO 分類が改定され、非小細胞肺癌患者の生検検体で組織亜型が不明の場合に免疫染色を追加し、favor adenocarcinoma (ADC)、favor squamous cell carcinoma (SQC)、not otherwise specified (NOS)-null に分類することが推奨されているが、臨床的意義について検討した報告はない。本研究では、免疫染色による分類が行われる以前に治療を受けた組織亜型不明の進行・再発非小細胞肺癌患者 152 名を対象とし TTF-1 と SP-A、ｐ40、CK5/6 で免疫染色を行い、3 群に分類しそれぞれの臨床的特徴を解析した。研究結果から、favor ADC（TTF-1 または SP-A 陽性）群では EGFR と ALK の陽性率が高い傾向があり、favor SQC（p40 または CK5/6 陽性）群と比較し、予後が良好であることが確認された。また NOS-null（すべて陰性）群は 3 群の中で最も予後が不良であることが示された。ペメトレキセドを含むプラチナ化学療法は他のプラチナ併用化学療法と比較し、favor ADC 群では同等の客観的奏効率を示したが、他の 2 群では低かった。以上の結果より、免疫染色を用いて分類した 3 群間で予後や特定の化学療法の奏効率、ドライバー遺伝子変異の頻度が異なっており、組織亜型不明の非小細胞肺癌患者の生検検体に対する免疫染色は予後予測や治療法選択のために重要であることが示唆された。<br>よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。 |